

# 未来へつなぐ荒木あけみネット

第1号 2014年7月12日  
内部討議資料



## 荒木あけみの活動報告

こんにちは、荒木あけみです。

2010年に東京から函館へUターンして、3年半が経ちました。その間、2人の娘の子育てをしながら、市民活動や仕事づくりに取り組んできました。

今回のニュースレターでは、①市民活動、②会社設立、③子育てしながら思うこと の3つについて、書きたいと思います。

スペースの都合上、それぞれについて触りだけになりますが、この3年半の荒木の活動を大まかにとらえていただけたらと思います。

### ① 市民活動

2010年に、道南の女性の自己実現を支援する会である「はばたきの会」を立ち上げました。活動目的の一つである「仕事を創る」ことに注力し、シェアするマタニティウェア事業等、実験的な試みを通じて、函館の社会的課題解決につながる事業を模索しました。（その結果、起業につながった事例は、次頁の②をお読みください）その他、マーケティング勉強会や、映画の自主上映会（『幸せの経済学』）といった活動を会員さんと共に続けています。



それ以外にも、複数の市民団体に所属しています。テーマは、大間原発訴訟、多民族共生社会、認知症の人や自死遺族の支援、子育て支援、デートDV防止、と多岐に渡ります。

中でも「女性」をとりまく情勢・環境やいかに社会で活躍しやすくなるかは大きなテーマです。

2011年には、市の派遣で、国立女性教育会館での男女共同参画フォーラムに参加する研修を受けてきました。

はばたきの会以外の女性団体・子育て支援グループと協力して事業を行うこともあります。



### 荒木あけみ プロフィール

1973年（昭和48年）函館市生まれ、松風町育ち（旧姓鍵山）。41歳。遺愛女子高、お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒。市場調査会社（マーケティングリサーチ業）で14年間勤務（海外10カ国以上に滞在し、消費者と企業を調査）。その後、2010年に函館へUターン。女性の自己実現を支援する「はばたきの会～道南女性の自己実現を支援する会」を立ち上げ、①仕事を創る、②スキルを身につける、③役立つ情報を入手することを目的に活動。その中から誕生したのがエゾシカ革を使った製品ブランド「MaW(マウ)」。会社経営、幅広い市民活動を通して、函館の魅力・良さを未来につなげる活動を行っている。

趣味：体を動かすこと、楽器演奏、格闘技鑑賞 家族：夫、娘2人（小5、小1）



2014年2月名古屋三越 1  
『大北海道展 職人・工芸品まつり』  
へ出店したときの一枚。

2014年3月北海道新聞みなみ風!



## ②会社設立

### MaW (マウ) エゾシカ革製品

はばたきの会の活動から生まれたのが、エゾシカ革を使った革製品「MaW(マウ)」です。2012年には、独創性のある起業に対して認定される函館市の「チャレンジ計画」に通過し、2013年3月に株式会社ILiKEIT(アイライクイット)を設立しました。女性の働く場を創りたい、という思いから始まったこの事業、5名の女性が革製品の製作に携わっています。また、北海道に生息するエゾシカの獣害が拡大する中、個体数が管理されています。捕獲

されたエゾシカの皮が無駄にならないよう、革製品として新たな命を吹き込んでいます。北海道ブランドとして大切にしていること。それは、一北海道に住む我々和人も、アイヌも、エゾシカも共生—ということ。アイヌ文化の継承やアイヌの方々の雇用につながるよう連携して活動しています。現在は、函館市元町にMaW本店(カールレイモン、やまじょう隣)、函館空港2階アイヌ民芸店ラブにて商品を取り扱っています。

## 荒木あけみ 市民活動報告1 絵本読み聞かせボランティア グループ「アリス」



荒木あけみは、アリスという絵本読み聞かせボランティアグループに所属しています。定期的に、函館市中央図書館や市内の幼稚園、保育園、児童館、小学校等で読み聞かせをしています。また函館市保健所での10ヶ月健診の場でも、本の紹介や読み聞かせをしています。地域の赤ちゃんから小学生まで幅広い子どもたちにふれあい、様子を知ること、地域の子育て支援の課題に気づくよい機会になっています。

## ③子育てしながら思うこと

### 子孫にツケを残したくない、安心して住めるまちを未来につなぎたい

荒木あけみは、函館に生まれ、高校卒業まで函館におりました。気候、食べ物、人口密度、色んな面でちょうどよく、住みやすい良いまちなんだ、という言葉を目にしながら育ちました。東京へ出て、19年間過ごしました。その間、進学・就職・結婚・出産・子育て、と人生の節目となる出来事を経験しました。子育てしながらも仕事は続け、10ヶ国以上の国をまわり、各国の消費者の生活や行動を見てきました。一方で、たまに帰省するときに見る函館の姿からは、あまり活気が感じられず、昔の同級生達からはつらい話を聞きました。函館に育ててもらったと感じる荒木は、いつかUターンすると考えていましたが、そのタイミングが2010年にやってきました。

いくつもの市民活動や事業活動を通して感じる。それは、できる範囲で社会的課題を解決するために動いている人がたくさんいる、ということです。その方々は目立たなくても、どこに依存することもなく、明朗会計で(時には私財を投じて)大切な活動を続けています。右肩上がりの成長、競争に次ぐ競争、でやってきた経済価値を優先する社会。どうもこのまま進むとは思えませんし、パラダイムの転換期に入っていると感じます。私たちが住む函館は、住んでいる市民が考え、主体性をもって未来につなげないと!と思います。荒木あけみもその中の一人として、人とつながり、未来に「函館」をつないでいきます。

